

近代少女雑誌『少女界』の読者に関する研究

—投書欄「女子談話会」の投書を中心に—

田中 卓也

【はじめに—問題意識の所在と先行研究の検討】

本研究は、少女雑誌であった『少女界』を取りあげ、同誌の読者の「投書欄」に焦点を当て、その誌面の内容・構成がいかなるものであったのかについて考察する。また投書欄に寄稿した投稿者（読者）の特徴について明らかにすることを目的とする。

少年雑誌及び少女雑誌に関する先行研究には多くの蓄積がある。今田絵里香はその著書『少女の社会史』において少女雑誌『少女の友』『少女倶楽部』をその対象にして「読者が少女雑誌に示された『少女』の行為規範の変遷を明らかにし」ながら、「読者が少女雑誌の提示する『少女』をどのようにとらえ、受け入れていったのかについて明らかにしている（今田 2004, 121）また川村邦光は『女学世界』『少女世界』に集った少女（女性）読者らによる、目には見えないく想像上の読者共同体（オトメ共同体）が誌面上で存在していたことを検証した（川村 1993）。さらに本田和子も＜少女幻想共同体＞の存在にふれ、明治後期の少女雑誌を考察するなかで、「少女雑誌が投稿欄を通じたネットワークによって、女学生の資格という有無にかかわらずなく、ペンネームを用いて、『少女』という『虚構集団』を形成させた」と指摘している（本田 1990）。また『少年世界』の読者を取り上げている成田龍一の研究も見逃せないのである（成田 1994）。本研究は、わが国における近代少女雑誌の読者に関する研究の一端に光を当てるものになる。なお本研究は平成 21 年度「文部科学省科学研究費補助金」【若手研究 B】「近代日本における児童教育雑誌の成立と読者共同体の成立過程に関する研究」（研究代表者：田中卓也、課題番号：20730519）及び平成 21 年度「吉備国際大学共同研究費」における研究成果の一部である。

【1】『少女界』の誌面構成およびその内容

（1）価格と誌面構成

『少女界』はいかなる雑誌であったのか。創刊号（第 1 巻第 1 号）は、1902（明治 35）年 4 月 11 日に刊行された。1 冊の定価は金 10 銭であり、全 140 頁から成っていた。第 1 巻第 1 号の「目次」よりその内容について見てみると、誌面は大きく「口絵」（写真）「御伽談」「學術」「雑録」「余興」「通信」「世事」「文林」の 8 項目から構成されていた。また全 140 頁の紙幅が割かれていた。誌面の冒頭には「常宮昌子内親王殿下」「周宮房子内親王殿下」の口絵写真が掲載されており、貴賓のある女性をイメージとした女性像を読者・投稿者に持たせようとしたのであろう。

また当時の政治状況を示す「唱歌 日英同盟」や「日英協約の解」といわれる記事も掲

載された。同誌第3巻第7号（1904年7月1日）の目次ではこれまで日清戦争や日露戦争等大規模な対外戦争を経験したわが国の「軍国主義」の影響、「軍人の家庭」の2名の令嬢（三須みよ子嬢・上村敏子嬢）を取り上げ、当時の「良妻賢母」の模範女性としての生き方、処世術などを誌面に掲載することで少女読者らに対し模範とさせようとしていた。

（2）少女界の発刊

では、『少女界』の発刊の契機はどのようなものであったのか。創刊号であった同誌第1巻第1号（1902年4月11日）所収記事「少女界の発刊について」では、次のように記されている。

【少女界の発刊について】

小学校生徒の読物として適切なる雑誌の乏しきを慨き今般更に少女界と題する雑誌を発刊し専ら女兒の為に好伴侶たらんとす

世間幾多の学士教育家諸彦に望む願くは弊社の微意を諒とせられた本雑誌に対して続々御寄稿を賜らんことを

「小学校生徒の読物として適切なる雑誌の乏し」い状況を嘆き、「今般更に少女界と題する雑誌を発刊し専ら女兒の為に好伴侶たらんとす」ることを目的として刊行された同誌は、女子の「小学校生徒」をおもに年齢対象とし、「世間幾多の学士教育家諸彦に望む願」むところから、同誌が教育界においても信用のできる少女雑誌となるよう望んだ。

（3）「通信」欄の設置とその内容

同誌同号の通信欄では「此の欄へは、読者諸嬢の見たこと、聞いたこと考へたことと思つたこと。何でも投書なさい。但しそれは端書で一行二十二字詰五行以下にかぎるのです。宛は東京市日本橋 区本町三丁目十七番地金港堂書籍株式会社編集部少女界記者 附言読めないのや、意味のわからないのは困りますから止むをえず没書にしますからよくわかるよーに願ひます。而して規則に違つたのも無論没書です」とあり、投稿者に対し、誰が見ても分かるような投書を望んでいる。投書掲載は、執筆者の確認では第1巻第3号からである。では同号にはどのような記事が掲載されていたのか。

▲一筆しめし上まいらせ候妾しこと少女界の絵のよいことに感心しました。どうか次号にもあんなよいのを御願ひ致しますかしこ（福岡 久永もと）

▲日本国中に少女専門の雑誌は少女界より有りますまい。どうかおたつしやで妾したちの為に骨折つて下さいませよ（大坂 川口つち子）

2人の投書家のものである。いずれも『少女界』に関心をもち、期待していることがうかがえる。またともに2人の投書家は文中において「妾」という言葉を使用し、自らをへりくだった表現を用いた。「妾」の使用は、同誌においてもよく見られ、使用については女性投書家のなかでも暗黙の了解で行われていたのかもしれないし、「わたしたち」というアイデンティティを表現するものとして、使用されたものであろう。

また同誌第1巻第7号（1902年7月11日）の「通信」欄では、次のような投書が見られる。

- ▲私がいつも学校かえり悪しき男生徒が海老茶式部とか天女とか云ふて私をからかいます。学校学校女子生徒の規則を破らんでからかわれるのを大に残念に思います。自が品行を悪しきにするかを知らずして女子を馬鹿にするわ実に今後同断なる悪き男生徒と云ふべし（小里女史）
- ▲諸嬢に一寸忠告致します。学校々々雑誌といずれが大事にお思ひなすつて松山のお城の下子さんのまねはよして下さい。又三浦利子の君は日本少女の為め大恩人で小山とし子の君はほんにさつぱりとして私等のお手本と思ひます。お顔を拝したいこと（さよひめ）
- ▲あたしね毎号少女界を愛読していますが慕はしい蕉友神戸の山に文子さんや渥美香枝子さんも読んでいらつしゃるだろうと思ひますとね尚々少女界がすきになりました（某女）

同誌に投書を寄せる者は「小里女史」「さよひめ」「某女」のように「匿名」（ペンネーム）を用いていることが見受けられる。また日常生活の報告や誌上での親友（誌友）の紹介、他読者への呼びかけを意図する投書、質問意見の投書など様々な内容が出版社に寄せられた。また同誌第1巻第10号（1902年12月11日）の「通信」欄では、以下のような投書が寄せられている。

- ▲私は山邊妙子さんの歌会へ入りたいのです。此度の日はいつですか。妙子さんの年おいくつ。私説女史さんと同じ心です。和歌をぼしうして下さい。（ささき）
- ▲私は誠に無学の者ですが、少女界の愛読者ですから皆さんどうかよろしくおつきやいをねがいます（大坂、無学生）
- ▲私は信濃の山の奥の賤女ですが、大の少女界の愛読者です。これから皆様と御交際致し度思ひますからよろしく願ひます（美篤刈る信濃の山奥にて、竹内ゆき子）
- ▲妾共が少女界第九号を見て殊に嬉しく感じたのは彼の「仲よし」の口絵ですよ。今後とも何卒あの様なる美しき口絵を載せて下さい（中村良子、黒岩茂子）

上記史料中の匿名「ささき」の投書では、「私は山邊妙子さんの歌会へ入りたい」、「妙子さん年おいくつ」と表記されており、山邊との交際を求めている。「大坂、無学生」の投書では「少女界の愛読者ですから皆さんどうかよろしくおつきやいをねがひます」と述べるように、自らを「愛読者」と称し、他の読者に誌上での交際への願望を吐露している。「信濃」出身である「竹内ゆき子」も同様に「御交際」を望んでいる。「中村良子、黒岩茂子」の両投書家に至っては、「妾共」と称し、いずれも記者への「口絵」に関する報告を寄せている。かくして『少女界』の読者は多くの少女読者から構成されていた。彼女らは誌上「投稿」欄の「通信」欄に集い、記者や他読者に対し寄書した。投書の内容は誌面への要望・感想・意見等のほか、同誌を愛読する読者仲間（誌友）を探し、交流を求めるものも存在した。自らを「愛読者」「妾」といった表現を用い、誌面上での交際を行い、

誌友を広げた。

【2】誌面における愛読者仲間の形成

(1) 読者の年齢層と女性言葉の使用

「通信」欄に集う少女読者らの年齢はどのくらいの者であったのか。同誌第3巻第11号(1904年11月11日)の「通信」欄より見てみたい。

▲少女界に投書するのは何才位まででございますか。高等女学校の四年五年もつと上の卒業生でも投書して賞を受ける方がありますそうですよ。どうぞ年に制限を置いて下さい。(加藤やす)

答 少女といへば十五才位までです然し記者には大きい方か小さい方かわかりません。斯ういふことは皆さんの良心に責めるより外致方ありません。

▲記者様和歌や文林はいくつまでだして下さるの(十四の一少女)

▲この間少女界に小林栄子十五としてあつたの。私ではないの。私十一なのよホホホホ。よくつて私もこんど少女談話会へ入りたいのよ。いくつから入れるの(本郷小林栄子)

答 何歳でもいいわ

▲尋常小学校4年生の者で御座います。今度少女界の愛読者になりましたので、よろしく御願ひします。私の学校には少女界を好む友が沢山おりますのよ(竹縄一少女)

▲駒込の白すみれ様。私は跡見女学校に通学して居りますの。貴女も早く跡見に入学遊ばせね(跡見女学校生徒永峯静子)

女子の小学校生徒を対象として発売された同誌であったが、「通信」欄を見る限りでは、尋常小学校の児童から女学校の生徒までの年齢と思われる者が投書を寄せている。幅広い年齢層の「少女読者」から読まれていたのであろう。また「記者」からも「通信」欄を通じて各投稿者宛に伝言することもしばしばであった。同巻同号において「▲記者より 交際の通信は、名前だけ出して下さいといふ方もありますが、これは一向他の多勢の方にはつまりませんから出しません。別に交際を乞ふといふ通信を出さないでも、少女界愛読者は皆さんが御友達で交際しているのも同じことです。毎月通信は四五百枚位まいりますから、これを一々挙げようとすれば殆んど通信ばかりで頁を埋めなければなりません。それゆえ記者は、多忙の中で皆さんに為めになりそうな面白さうなものを選んで掲げます」と掲載されており、交際のみを求める投書以上に内容のあるものの「面白さうなもの」を編集者側で選別し、掲載することを読者に伝えている。「毎月通信は四五百枚まいります」とあることから「四、五百」以上の投稿者がいたのであろう。また同誌第3巻第7号(1904年7月11日)および同誌第3巻第11号(1904年11月11日)の「通信」欄誌面では「▲岩瀬秀子様に私のところは越中八尾と有ればぢきにおはかりになります立峰清子様御手紙有りがとう皆様私の地方では今一番螢の沢山居ます時で御座んす事螢狩は面白いね(清島さと子)」や「▲馬鹿と名乗のつて投書なすつた方貴女は大にお心違よ。私も記者様を怨みし事も有つたが能く考れば全く自分の不勉強故です。あなた心を入かえて有益な愛読者

とお成り遊ばせ。□△○子様も貴女の為めよ（小田原井上久子）」などがそれである。

当時の少女雑誌においては、このような女性特有の言葉を使用した手紙などが後を絶たなかった。まさしく少女読者を中心とした女性の世界を誌面上で創出している。このことはさきに挙げた川村邦光『オトメの祈り』（1993）、稲垣恭子『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化—』（2007）、佐藤八重子『ミッションスクール—あこがれの園—』（2006）などにおいて詳細にふれられているので、稿を譲ることにしたい。

（2）学習意欲・進学意識の強い読者の存在

『少女界』第4巻第8号（1905年8月1日）における読者の中には「▲記者様（一）私算術を勉強しようと思ひますがよく分る様な本がありますれば定価と名とを御知らせ下さい（中略）（常陸一少女）」「▲桐生の青木ゆく子様。私白ゆりの唱歌をおぼえたいと思ふて居りましたに幸あなた様が御存じとの事ですからおそれ入りますが御送り下さいませんか（米澤市鍛冶町 加藤春子）」「▲私ね。播磨の望者として算術をこの本誌に於て題を皆からでも出してなさらうと云ふ御志に大賛成なのよ。あなたよい思ひつきなされてほんとに私嬉しいのよ（京都 喜多川千代子）」のような投書があり「算術」「唱歌」等に関し、投稿者の学習意欲があらわれている。彼女らの投書は自らの学習意欲を高めることにも役立てていたように見受けられる。さらに『少女界』の投書家のなかには、「進学」に関する質問や疑問について、同誌第4巻第8号（1905年8月1日、「通信」欄）に次のような投書が見られた。

- ▲記者様私ね東京の師範学校へ入学致したいのですがやはり体格検査をするの。それからどの位の学力がいるのですか。次号で教へて頂戴な（弱き一少女）
- ▲記者様年齢二十才にして尋常小学卒業の者が共立女子職業学校に入学致されますでせうか。又同才くらいのお友達があるでせうか（出雲三木英子）
- ▲記者様私は東京の堀越裁縫女学校はいりたいのですが年はいくつ学力はどのくらいでしう（岩代一少女）
- ▲紫野芳子君の御尋ねなすった女医学校試験ね。無試験とありましたが体格検査はあるのでせう（肥後俊子）
- ▲一記者様高等二年卒業してあがる女学校は何と云ふ学校がいいでしよ一。二又近眼いくどぐらいまではいれるでしよ一（一少女）

「東京の師範学校へ入学致したい」とする「弱き一少女」や「尋常小学卒業の者が共立女子職業学校に入学致されますでせうか」と問う「出雲三木英子」、さらには「東京の堀越裁縫女学校はいりたいのです」という意欲を持つ「岩代一少女」のように東京の学校に進学して勉強に運動にがんばりたかった少女であったのか。さらには「肥後俊子」のように「女医学校試験」に関する情報を通信欄で教えたりする者がいたことがうかがえよう。

『少女界』に投稿欄に集った読者らは、誌友を見つけるだけでなく、自らの学習意欲や進学意欲を高めることもあった。その際には投書した者は投書欄を活用し、記者に質問してみたり、愛読者の仲間に相談したりと様々な方法で行った。

(3) 「少女談話会」に集う読者—誌面を超越しての読者共同体—

同誌では第4巻発刊のものより、「時報」欄のなかに少女読者が集う会として「少女談話会」を紹介し、同会の開催実施報告について掲載されていくことになった。その事情について同誌第4巻第2号(1905年1月11日)の記事よりうかがうことにしたい。

●各地の少女談話会景況

各地の皆さんの談話会等おひおひ盛んになつてまことに記者も喜ばしう御座います。近いところなれば記者も臨席して一場の御話しを申し上げたいが、どうもさうも参りませんで残念です。就いては成るべく必要のことだけを摘み、文章を短く其景況を報告して下さい。余り長いのは掲げません。これから報告書には明らかに国と処とを書いて下さい。名前ばかりでは何処の談話会かわかりませんから。

日本橋区第一回少女談話会

私等は十二月十日を以て第一回少女談話会を高野花子さんの御案で開きました。会長さんのおかげで室内もきれいに飾つてありました。午後三十分に開会致し、会員十四人会長開会の辞、其から各役員を定めました(中略)それで会費三銭でありました。其から会長の談話がありまして次いで役員会員諸嬢の談話が終りまして諸所の学校の御話などして後余興にうつりました。世界一周かるた百人一首少女界家庭双六等をなし遊び此の後も此の会を盛にせんことを約束して五時閉会致しました。此の楽しき半日を愉快に過しました(日本橋区堺町九伊藤梅子)

少女談話会報告(大阪西区京町堀)

私等は十二月十一日の日曜に初めて、談話会を開きました。(中略)

午後一時開会

一、会長開会の辞。二、天川さんの女子の心得。三、辻戸さんの孝子の話。
四、私のバイウオリン。五、絹笠さんの新体詩。六、橋本さんの滑稽膝栗毛。
七、山田さんの談話会発会祝文朗読。八、斉藤さんの深遠の山和歌二首。
九、稲垣さんの兄上戦傷話などにて少時の間茶菓を出して休みこれより(余興)
線香廻し一口噺、字合せ遊戯、目鼻付け、化物遊び(閉会)先は御知らせまで(書記
武藤愛子)

各地において開催されている「少女談話会」はおもに同誌に集う読者仲間から結成されていた。そこでは「百人一首」「少女界家庭双六」などのような娯楽物から、「孝子の話」「新体詩」「山和歌二首」といったような学習内容までを含んだ会であったようである。これまで読者が集っていた「通信」欄で行っていた「誌上の交際」から誌面を越えての交際が始まっていたものと見る事ができよう。また、同誌第4巻第4号(1905年4月1日)より新欄として「少女談話会」が設けられた。

▲記者様私の俳句は出ないのは私のようなのはいけないのでせうからこれからべんきょうします。それから遠藤ひさ子様と相談し函館の愛読者皆さんと談話会を開きたいと

思ひます。（函館平野すえ子）

- ▲越中福岡町の酒井きよ子さんと木幡みどり子さんに申します。妾等の町に少女談話会を設けよでは有ませんか。随分為に成ると思ひますから次号に御返事をね。（越中福岡の二少女）

少女談話会では、誌面を越えての他読者との交際が図られていた。「越中福岡の二少女」が「妾等」と文章中で公言しているように、「われわれ」というアイデンティティのもと、少女談話会の立ち上げを企図する者もいれば、賛同する読者に対し呼びかけ、宣言したりする者も存在した。「通信」欄での交際以上に投書家同士のより親密な交際を求めたのかもしれない。かくして『少女界』の読者投稿欄にぎわせたが、当時の少女雑誌ではめずらしいことではなかった。「少女談話会」を通じて少女読者らは誌面をこえた「読者共同体」を形成していった。

【おわりに—永遠に「少女」でありたいと望む読者たち—】

同誌第10巻第1号の発刊後、出版は金港堂から「東京大洋社」（東京市神田区淡路町）に変更される。変更理由は史料がないため詳細は不明であるが、おそらくは金港堂の経営不振があげられる。また同誌第10巻第11号（1911年9月27日）の「通信」欄の投書には「夢の子様のおつしやつた通り私も近藤國子様はたしかに男の方と思つて居りました。男の方が女子のみるべきものに投書なさるとは・・・」なる投書を寄せた匿名「鳳仙花」の言葉にあるように「男子読者」の存在を指摘する内容のものも見られるようになった。

同巻同号ではさらに筑前嵯峨山きぬえによる「嬉しや・・・只今美事なメダルを落手いたしました。不束な文をお載せ下されてあまつさへ記念銅牌まで頂きまして私は天にも昇つた程嬉しうございます」の投書などに見られるように、メダルを獲得することが榮譽と見る読者も登場してくるようになった。

投書内容も変化することになったが、「少女」読者同士の交際を求める投書は後を絶たなかった。先述の同巻同号には次のような投書が寄せられた。

- ▲大津高女の文子様木村梅の様な福井定様を御存じでせう。私とは小学校時代よりの大仲良しのお友達なのよ？有元若菜様山海裳様のお写真八月号の少女で拝見してなつかしく思つて居ります（滋賀夢星子）
- ▲東京芝区の影法師様烈しい暑さも御障りはありませんでしたか？沼津に御出での折は貴女誌上に御写真を御出し下さいな。どうぞお尋ね下さいな御願ひ致します。何卒御大切に左様なら（沼津にて君蔭草）
- ▲原田きく子様中島てる子様十二日は実に残念でしたね。怒らないで又誘つて下さい。以後はきつと御とも致しますから・・・誰か当てて御覧遊ばせ（下関にて一少女）
- ▲クラスの佐藤秀子様らとお振ひ遊ばせクラス一の文書家ですもの。妾も投書致したいのは山々ですけどあまり下手なので記者様に恥ずかしくつてホ・・・秀子様私はだあれあててごらん遊ばせ（函館信子）

投書の内容に着目すると「有元若菜様山海裳様のお写真八月号の少女で拝見してなつかしく思つて居ります」と投書した「滋賀夢星子」や「貴女誌上に御写真を御出し下さいな」と呼びかける「沼津にて君蔭草」らの記述をみるなかで、「写真」の存在が目をつくる。少女読者らはこの「写真」を見てなつかしみ、いつの日になっても「少女時代」に帰ろうとしたのであろう。写真は永遠の「少女」の心の中にある絆の証であったのであろう。

すなわち同誌の投稿欄に参集した「少女読者」らは、永遠に「少女読者」でありたいと望み、誌面上すなわち「通信」欄はその聖地として少女読者からは捉えられていたのであろう。「通信」欄にて少女読者の共同体を具現化していったのである。『少女界』の読者は多くの少女読者から構成され「通信」欄に集い、記者や他読者に対し寄書した。小学校女子児童を対象とした同誌であったが、実際は小学生頃の年代から女学生まで年代の幅広い読者層を獲得していた。同誌を愛読する読者仲間（誌友）をさがし、交流を求める者も存在した。投書家自らを「妾」とよび「われわれ」というアイデンティティを保持しながら、彼女らは誌面上での交際を行い、誌友を広げた。また同誌に集った読者らは、学習意欲、進学意欲を持ち、投稿欄の記者同じ愛読者の誌友らに質問・意見し、相談を依頼した。

「少女談話会」の誌面での結成や募集は、読者に大きな影響を与え、各地で談話会結成の動きが見られるようになった。談話会入会は投稿者（読者）にとって、さらに親密な交際へと発展する機会ともなっていた。その後も同誌は誌面の変更、投書のルール徹底などを行っていくものの、読者のつながりの絆は強く、「永遠の少女」でありたいという少女読者らは「通信」欄に集い新たな誌面交際を繰り広げた。

【参考・引用文献】

- 今田絵里香 2007『「少女」の社会史』（双書ジェンダー分析 17）勁草書房。
川村邦光 2007『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生—』紀伊国屋書店。
本田和子 1990『女学生の系譜—彩色される明治—』青土社。
成田龍一 1994「『少年世界』と読者する少年たち——一九〇〇年前後、都市空間のなかの共同性と差異」
『思想』岩波書店。
稲垣恭子 2007『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化—』中公新書。
佐藤八重子 2006『ミッションスクール—あこがれの園—』中公新書。
岡谷英明 1996「『幼年雑誌』にみる読者共同体の教育的意義」『日本の教育史学』39: 46-62。
内田雅克 2005『「大日本帝国」の“少年”と“男性性” —少年少女雑誌にみる“ウイークネス・フォビア”—』
明石書店。
渡部周子 2004『<少女>像の誕生—近代日本における少女“規範”の形成—』新泉社。